

# 「それでも神は」

(詩3:1~9)

挽地茂男

2019.11.3 千歳丘教会永眠者記念礼拝

先々週の土曜日(26日)に、一本のお電話がありました。それは、永眠者記念礼拝のあとで皆さんに召し上がっていただきたいので、お茶うけになる和菓子を送りたい

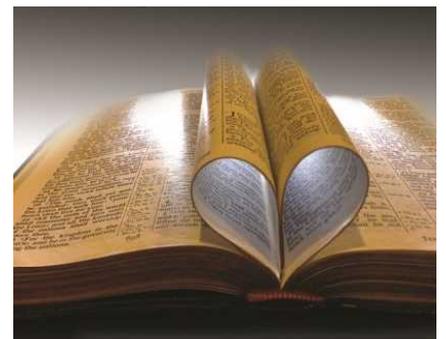


という内容のお電話でした。その方の名前は小林宮子さんと仰いまして、

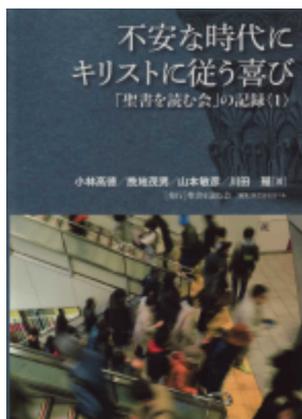
実は、昨年も栗あんをお送りくださいました。ご主人の名前は、小林高德と仰ってわたしの友人の一人です。この方については、今年の永眠者記念礼拝のお話しの中で、お話しさせていただいたので、覚えておられるかも知れません。彼は一昨年召天されたとき(2016.10.24)には、東京基督教大学の学長職にありました。フィリピ書の研究者で、学会の仕事でアメリカ滞在中に、召されました。ロス・アンゼルス教会に日曜礼拝の説教の奉仕に向かうタクシーの中で喘息の発作を起こし、その喘息が引き金になって、心筋梗塞を誘発し、病院に救急搬送し手術を施

されたのですが、その甲斐もなく天に旅立っていきました。「もう2年も経つのですね」と電話口で申し上げると、「もう2年と申しましょうか、まだ2年といった方がいいのか…」と返事が返ってまいりました。おそらく愛する者を失って過ごす2年は、時計の針が2年分動いたのとは質的に異なる2年を過ごして来られたのだと推測いたしました。昨年一周忌に。贈り物とお便りを頂いたときには、亡くなってからもう一年がたったんだなあ、という感慨を新たにしました。そのお便りの中で夫人は、今でも玄関のドアを開けてご主人が帰って来るような気がする、と語っておられました。大切な人を亡くした喪失感を癒やすのに時間だけではない何かを必要とするのだということが分かります。

この教会の集会室をお借りして行っておりました「聖書を読む会」の仲間でしたから、わたしにも時々、聖書研究会で学んでいたときの友人の笑顔がフラッシュバックする 때가ございます。わたしは、彼が



その聖書研究会で発表しました原稿（遺稿）を整理して、他のメンバーの原稿と併せて、聖書を読む会の記録として小冊子の形で昨年の2月に『不安な時代にキリストに従う喜び』という題をつけて出版いたしました。おそらく奥様は、今もって、夫が千葉から聖書研究会に参加するために遠距離を通っていた教会、その教会で行われる永眠者記念の礼拝を、他教会でありましても、ご自分の教会の永眠者記念の礼拝と同様に、等閑に付すことの出来ない機会として意識しておられるのかも知れません。今日は、永眠者記念礼拝ということで、主の許に召されました皆さまのまたわたしたちの忘れがたい愛する家族、友人、先達・諸先輩を記念して、ご一緒に礼拝を献げることのできる恵みを感謝いたします。



今日礼拝の最初の方で歌いました讃美歌はイギリスの皇太子妃でありましたダイアナさんの葬儀で歌われた歌であります。先ほど申しましたわたしの友人の愛唱歌でもありまして、彼の葬儀でも歌い

ました。もともとアイルランド民謡で「ロンドンデリーの歌」と呼ばれています。ポピュラー音楽では「ダニーボーイ」という曲名で古くからよく知られた曲であります。アイルランドという国は、悲しい歴史を持つ国で、先頃(昨日まで)行われておりましたラグビーのワールドカップを見ましても、その歴史の片鱗に触れることができます。アイルランドは2本の国旗をもって登場します。1本は1921年に英国の植民地から独立いたしました際に採用された、新しい緑と白と橙色の縦縞の三色旗で、もう1本は現在の北アイルランドのありました北部六州(郡)を代表するアルスター地方の旗です。アイルランドの人々にとって北アイルランドは今でもアイルランドの領土なのです。わたしたちが歌いました「ロンドンデリーの歌」という曲も、アイルランドの人々は「ロンドンデリーの歌」



とは呼ばずに「デリーの歌」と呼びます。ロンドンデリーは現在は都市の名前ですが、かつてはデリーという名前で、1613年都市として勅許される際に、当時イングランド、スコットランド、アイルランドの覇権握っていたジェームズ1世(6世)の命によって、デリーという名前の上に、イングランドの首都の名前の「ロンドン」をつけさせたのです。また、アイルランドの第1公用語はアイルランド語(ゲール語)ですが、アイルランド語を話す人は、現在35.5万人で消滅危険言語に指定されています。言語を奪われた民族でもあります。英国の国旗であるユニオン・ジャック(Union Jack)自体が、英国の統合と分裂の歴史をとどめています。イングランドのセント・ジョージ〔St. George, 白地に赤十字〕旗に、スコットランドのセント・アンドリュース〔St. Andrew, 青地に白の斜

十字〕旗が組み合わされ(1603年)、その後アイルランドのセント・パトリック〔St. Patrick, 白地に赤斜十字〕旗が加えられて(1801年)、ユニオン・ジャックができあがります—英国の国旗は一般にユニオン・ジャック(Union Jack)と呼ばれていますが、ジャックとは船の舳先につける船首旗の事であり、正しくはユニオン・フラッグ(Union Flag)と言います。「ユニオン」つまり「連合」、不均衡・不平等な連合ではありますが「連合」の旗なのです。ですから、ラグビーやサッカーの試合になると、英国の選手団は、ユニオン・ジャックではなく、かつての王国の代表として、イングランド、スコットランドの国旗をもって登場してまいります。かなり早い時期にイングランドに併合されていたウェールズさえ、赤い竜をデザインしたウェールズの国旗をもって登場します。

ところで現在の英国情勢から推すと、英国の国旗であるユニオン・ジャックはやがて見ることができなくなるかもしれません。イングランド(イギリス)がEUを離脱した場合、スコットランドは



EUに留まるでしょうし、アイルランドは北アイルランドを奪還して、EUの加盟国として留まり続けるでしょう。ウェールズがどうするか分かりませんが——ウェールズの旗はユニオン・ジャックに入っていませんが——いずれにしろ、ユニオン・ジャックはいずれ消滅する可能性があります。政治とはつねに、領土を取ったり取られたり、くっついたり離れたりを繰り返すものです。

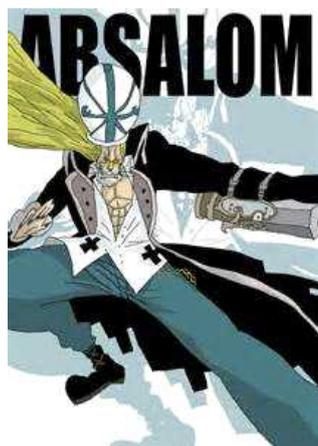
今日読みました詩編第3編にも古代の政治が絡んできます。この詩編は、通称「朝のうた」と呼ばれておりまして、「夕べのうた」と呼ばれている次の詩編第4編と一対にして古来イスラエルの礼拝において朝に夕に歌われ、親しまれてきた詩<sup>うた</sup>であります。1節にこの詩の背景が説明されています。

「賛歌。ダビデの詩。ダビデがその子アブサロムを逃れたとき」と書かれておりまして、これが、この詩の背景にある事件なのです。



その事件を手短にお話ししますと、つぎのようなことがありました。ダビデの事ですから今から約3000年前のことになります。ダビデはご存知のようにイスラエルの有名な王様ですが、アブサロムと申しますのはダビデの息子で、ダビデの王位をつぐ後継者となるはずの人物でありました。しかし彼はその父に対して謀反を企てたのであります。日本で謀反といえは、織田信長に謀反を企てた家臣の明智光秀が有名ですが、ダビデの場合自分の実の息子だったわけです。ダビデは王宮を逃れざるを得ないところまで追い込まれます。しかし王宮を逃れ去っても、ダビデは、自分の息子アブサロムの配下の者に追われる身となります。この事件は最終的には、アブサロムの軍隊とダビデの軍隊が戦いを交えて、アブサロム軍が敗北し、息子アブサロムが戦死するという悲しい結末を向かえて決着します。戦死した息子アブサロムの遺体に対面したダビデは号泣を致します。「わが子アブサロム（新改訳「アブシャロム」）。わが子よ。わが子アブサロム。ああ、わたしがおまえに代わって死ねばよかつ

たのに。アブサロム。わが子よ。わが子よ」(サム下19:1／新改訳18:33)。『アブサロム、アブサロム!』(1936年)という有名な小説があって、ノーベル賞作家のフォークナーという人が書いた小説ですが、今読みましたダビデの絶叫



の箇所から題名を取っています。「アブサロム」という名前は「アブシャローム」、「アブ」は「父」、「シャローム」は「平和」つまり

「父の平和」という意味です。歴戦の強者であったダビデが最終的に求めた「平和」を象徴する名前を与えられた息子は、今や「平和」ではなく父ダビデに対する「背信」と「敵意」の固まりと化しているのです。今日の詩編は、そのアブサロムの父ダビデに対する謀反、肉親の裏切りを背景にして詠まれた詩であります。

2節3節を見てみましょう。「主よ、私を苦しめるものはどこまで増えるのでしょうか。多くの者が私に立ち向かい、多くの者が私に言います。『彼に神の救いなどあ

るものか』と。」敵対する者が彼の周囲に、増大しているのです。かつての彼の家臣が、いやあろうことか彼の息子が彼に立ち向かってくるのです。敵となった彼らは、逆境に立つダビデに向かってこう言うのです。「彼に神の救いなどあるものか」。なんと悲惨な親子関係でしょうか。しかしここでは、ダビデの直面している現状と、それに対するダビデの対処の仕方の対比が重要なのです。つまり敵が「神に見放された」と嘲るほどのほぼ敗北に近いダビデの今現在の現状と、それに対するダビデの信仰の態度の対比が重要なのです。謀反が起こり、敵が増大し、見た目には否定的な事実ばかりがそろっていて、神の救いから見放されたようなダビデ。そのような現状に置かれたダビデの向かうところが重要なのです。それは歴戦の戦によって鍛えられた強腕をもってする、直接的な現状打破の軍事行動でも、その現状打破のための具体的打開策を早急に立てるということではありませんでした。彼の第一声は、「主よ」という言葉です。ダビデはこの後、現状を打破するためには、具体的な方策を立

てていくことにはなりますが、しかしはず彼がなしていることは、いわば神と問題を共有するという信仰の立場を明らかにすることなのです。そこから困難な現状に立ち向かう勇気が再びわき起こってくるのであります。4節5節を見てみましょう。

「主よ、それでも、あなたは私の盾、私の栄え、私の頭を高く上げてくださる方。主に向かって声を上げれば聖なる山から答えてくださいませ。セラ。」

ちなみに3節にもでてきた「セラ」という言葉が気になっておられる方がいるかもしれません。これはイスラエルの礼拝で詩編を朗読したり歌ったりする際に、間をおいた部分で、ここに間奏がはいったとも、伴奏の調子が変わったとも言われております。言葉自体の意味としては、「永遠に」という意味を持っていると言われており、そういったある種の詠嘆の情を、間をおくことによって表現したか、豎琴などの短い間奏を入れることによって表したものと考えてよいかと思われます。

さて内容ですが、ここでは、先の2節3節とは異なって、ある種

積極的な調子が強く出て参ります。「それでも」という言葉が特徴です。現状が絶望的にしか見えない中で、「それでも」と、現状に反して、それとは逆の方向に、ある種の可能性が存在することを確信する、力強い逆接の言葉が使われています。それは一種の信仰告白であります。「それでも。」

この詩編3編は詩編の分類では、「嘆き」が先ず表明されているところから、「嘆きの詩編」という分類に入れられております。しかし「嘆きの詩編」と呼ばれる詩編に分類されている多くの詩編には、同じ特徴があって、それはすなわち、嘆きは嘆きで終わらず、信仰から、希望へと、いわば転調していくという特徴をもっております。つまり作者の「嘆き」は、最後には、讚美や他の人々のための祝福の祈りへと変化していくの



エルサレム神殿

です。

以前に『わが涙よわが歌となれ』という本を何回かご紹介したことがあります。この本の中には一人のキリスト者の力強い「それでも」という言葉が響いております。その本は、まるで「嘆きの詩編」のように嘆きが讚美になるというような本ですが、原崎百子という国際基督教大学（ICU）の一期生で〔川田殖先生の同級生でもありました〕、牧師の夫人であった方の著書であります。その本は、彼女が末期の癌であるという告知を、四ヶ月もの間思い悩んだ牧師である夫がついに妻に病状を告知したその夜の日記から始まっています。



●1978年6月28日（水）

今日という日を、つまり「1978年6月28日」という日を、ここに明記しておきたい。……私の生涯は今日から始まるのだし、これからが本番なのだ。〔中略〕

ありがとう、ありがとう、よく話して下さったわね。

可哀そうに！ さぞ辛かったですよ、辛かったですよ。……

それでもやはり私はリンゴの樹を植える。昨日、「明日やろう」と決めたこと——二郎（息子）に助動詞を復習してやること、忠雄の勉強の相手をする——をやっぱりやりましょう。

「それでもやはり私はリンゴの樹を植える」という言葉は宗教改革者ルターのものでありますが、この日記では自らの肉体的困難の現状を知らされたときにも、自らの日常を怠らず、淡々と続けていこうとする決意を表明するための言葉として使われております。「それでもやはり私はリンゴの樹を植える。」の「それでも」という言葉は神に向いた人間が発する特徴的な言葉なのです。

私たちが読んでいるこの詩篇3編の詩人も、意気も阻喪するような現実の中に置かれています。しかし争いに疲れ、自ら盾を取って闘う気力を喪失した者も、主なる神に向かうとき、「それでも」と立ち上がり始めるのです。神をわたしの「盾」と呼び現実の「盾」を取る勇気が与えられてくるのです。この3節の「盾」という言葉



は、「マゲン」というヘブライ語なのですが、旧約聖書を調べてまいりますと、イスラエルの民族と信仰の偉大な祖先であるアブラハムの信じていた神が、「マゲン・アブラーム」すなわち「アブラハムの盾」と呼ばれております。旧約以来、神を信じるものの「盾」は神御自身なのであります。

周囲の誹謗や中傷や悪口によって、かつての栄光が貶められ、すべて失ったかに見える者(ダビデ)も、主に向かうとき、「それでも」、神を盾とし、主を自らの栄光と宣言する勇気が与えられてくるのです。しかも苦しみを経た者だけが知っている、本当の栄えが、依然として去っていなかったことを知るのです。

そして彼はうなだれた顔を上に向け始めるのです。それを可能にしてくださるのは神です。4節後

半、「(主は) **わたしの頭を高く上げてくださる方。**」主は、困難や逆境に打ちひしがれて、失意の内に頭を垂れてしまった者の頭を再びもたげて、高く上げてくださる方であることが高らかに宣言されます。そして彼が頭を上げて、目を向けるところ、そこから主の答えが返ってきます。「聖なる山」、それはシオンの山、すなわちダビデが神の都を置いたエルサレムをさしています。シオンの山、それは旧約聖書では、主の山、救いの山とも呼ばれます。だからたびたび旧約の詩人は、救いを求めて「山に向かって目を上げる」のです(詩121)。この詩編121編の詩人は続けてこう歌います。「**詩121:1 目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。121:2 わたしの助けは来る／天地を造られた主のもとから。**」詩人の目は、助けを求めて見上げた山々から、さらに上に、高いところに向かって上がっていきま

す。  
ヘブライ人への手紙の著者は、アブラハムを含めて旧約聖書の信仰の人たちを列挙してこう言いました。ヘブライ人への手紙11章

13 - 16 節「ヘブル11:13 この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでした。はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです。11:14 このように言う人たちは、自分が故郷を探し求めていることを明らかに表しているのです。11:15 もし出て来た土地のことを思っていたのなら、戻るのに良い機会もあったかもしれませんが。11:16 ところが実際は、彼らは更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。だから、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませぬ。神は、彼らのために都を準備されていたからです。」彼らの目は、地上よりもさらに高いところに向かっていたのです。

救いを確信したダビデに、日常

的な安らかな眠りが訪れます。6 節。「身を横たえて眠り、わたしはまた、目覚めます。主が支えてくださいます。」目覚めたとき、まだ現状は変わっていないでしょう。しかし何かは確実に変わっているのです。それは彼の内なる現状でした。そして詩人は、その変化を7 節に、「いかに多くの民に包囲されても決して恐れませぬ」と表現するのです。彼の心の内に変化がやってきました。そして彼はついに立ち上がるのです。

8 節。「主よ、立ち上がってください。」彼が立ち上がるのは、神が立ち上がられるからです。「主よ、立ち上がってください」は古代イスラエルの軍隊が、出発するときの鬨の声であります。この表現には、彼の確信が宿っています。不安に満ちた2 節3 節の心境とは明らかに違います。「私の神よ、お救いください」と祈る彼の心に



は、もう半分救いが、解決が見え始めています。だからこそ、その解決に向けて、詩人はさらに強く祈ります。

9節は、彼の確信とその民への配慮を高らかに歌ってこの歌を締め括ります。彼には自分の問題を思うだけではなく、民つまり他の人々に思いを致す心のゆとりが戻って参ります。他者を思うゆとりを持った心、それは確信に揺るがない心の、もう一つの特徴であります。では9節をお読みします。

「救いは主のもとにあります。あなたの祝福が、あなたの民の上にありますように。セラ。」

お祈りを致しましょう。

2019.11.3 千歳丘教会永眠者記念礼拝

